

安楽寺寺報

開光

第54号
第24巻
2010/2/15

発行所
〒737-0054
京市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

相手と同じ立場に立つ

信楽峻磨

最近のテレビを観ていて、感じることは、何もそこまで写さなくてもよかるうに、と思うことがあります。

火事の報道において、死体を運び出す状況まで、なぜそれを伝えなければならぬのか。先般の島根の女子大学生事件の報道でもそうです。バラバラにされたその遺体のゆくえを尋ねて、ここに片腕がありましたなどと、山の中の風景まで写しだしていましたが、そこまで報道して何んの意味があるのか。このニュース・カメラマンは、亡くなった娘さんの両親の胸中を、少しでも想像したことがあるのでしょうか。こんな画像が、その身うちの人々の心を、どれほど傷つけることでしょうか。思いあまることです。心ない仕打ちとは、

感想でしょうか。

新聞も似たようなものです。先日新聞(中国新聞)に、国会のヤジについて、自民党の議員が、鳩山首相に向かって「このドラ息子」と叫んだことについて、「皮肉のきいた言葉」だとほめていました。記者はこの「ドラ息子」の意味が分かって、そういったのか。ドラ息子、ドラ娘とは、『日本国語大辞典』によれば、品行の悪い放蕩息子、どろぼうの仲間に入った娘のことだといえます。一国の首相をそこまで非人格的にヤジることが、皮肉のきいた言葉だと考えるのでしょうか。このことは、こんなヤジを飛ばした国会議員の品位の問題ですが、またそれを高く評

安楽寺マンガ通信

(第8回)

信楽めぐみ作



安楽寺御正忌参拝

1月13日(水)・14日(木)の2日間で、京都本願寺の御正忌報恩講に参拝してきました。

当日は今年一番の寒さの中(東広島は雪でした)の出発でした。この寒さは広島だけではなく、全国的な寒さで、京都の方も「こんな寒さは今年初めてだ」と言っていました。そんな状況でしたが、御影堂がここ10年間、平成の大修復のため閉鎖されており、今年が10年ぶりの御影堂での御正忌だったため、たくさんの御同行がお参りでした。ところが御影堂は重文ですので、火の気はもちろん、暖房類は全くない冷蔵庫のような御影堂で、ある住職は「これはワザと寒くしているんじゃないか」と疑ってしま



たが、それほど冷えた御影堂でした。しかし安楽寺の13名の参加者はその寒さにも負けず、しっかりと親鸞聖人のお姿を拜んで参りました。最後までケガも事故もなく、無事帰って参りました。是非また一緒にしたいと思います。今回ご都合のつかなかった皆様も是非次回一緒にしましょう。(前回の住職は最初この京都の寒さに「もう御正忌は二度と来ない」と言っていたのですが、先日は「御正忌は毎年本願寺へ参ろう」と言っていました。)

安楽寺彼岸会法要

下記の通り、彼岸会法要をお勧めします。昼からは御示談とさせていただきますので、日頃の疑問等をお寄せ下さい。あらかじめお葉書でお尋ねいただいても結構です。

- 日時 3月14日(日)
- 朝席 10:00~
テーマ「浄土真宗がめざすものは何ですか」
- 昼席 13:00~
御示談(質疑応答)

講師 信楽峻磨前住職

価する記者、新聞社の品位の問題ではありませんか。新聞は天下の公器であるかぎり、政治家を批判することとは大いに結構でしょう。だがこんな次元の低い批判は新聞の品位の問題です。テレビも新聞も、もっと自分自身の社会的な存在意義を自覚して、興味本位のレベルでなく、まっとうな報道や論説を伝えてほしいものです。

動いていくわけでしょう。親鸞さまは、その当時、世の中の人々から、もっともいやしめられていたところの、魚や鳥をとる獵師(りょうし)や、ものを売り買う商人(あきうり)を、



仏教の教えに「同事(どうじ)」ということがあります。他人とのかかわりをもつ時の心のありようを教えたものです。その同事とは、たとえば母親が、赤ん坊にスプーンで何かを食べさせようとする時に、「アーンしなさい」

「かやうの商人、獵師、さまさまのもの、みな石、瓦、礫(れき)のこくなるわれらなり」『唯信鈔文意』といつて、この人たちのことを「われらなり」、私たちのことだと申されております。親鸞さまは、私は僧侶の姿はしているけれども、ほんとうは、世の人々から、もっともいやしめられている、あなたたち獵師や商人と同じ人間なのです。何ひとつ変わったところはありません、といわれているのです。まさに「同事」の心であり、「同事」の生き方です。私たち念仏者もまた、心して学びたい親鸞さまの生き方です。

聞光 品格

信楽晃仁

一時期「国家の品格」という藤原正彦氏の本がベストセラーになりました。その後品格ばやりで「女性の品格」「男の品格」「親の品格」と品格本なるものが次々に出版されました。その品格本の中に、「横網の品格」というものもありました。

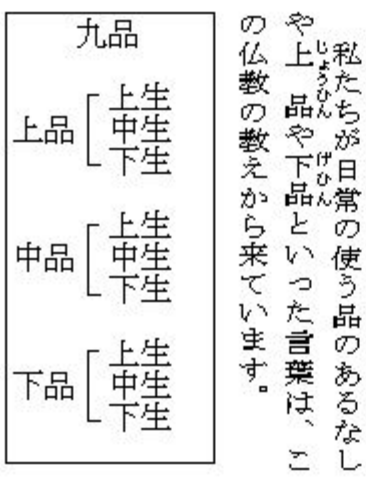
先般、優勝三回「平成の大横網」と言われた朝青龍が引退をしました。引退といえども「こえはいいですが、ご存じの通り、解雇を避けるために引退を促したようです。次々と問題をおこし、何度も厳重注意がなされたものの、最後は本場所中に泥酔して、一般人に暴力をふるったということが明らかにになりました。

日本の国技、相撲の横網といえ、心技体が揃って、横網と呼ばれるにふさわしい品格を持たねばならぬものであることが、モンゴル出身の朝青龍には理解ができていなかったのでしょう。これは一つに文化の違いがあり、世界観の違いがあります。朝青龍だけが悪いのではなく、それ

を教えることができなかった親方、そして力のみ、強さのみを崇め、横網とチャンピオンが同列にとらえられるような、武道とスポーツ競技を混同した考えがこのような結果を招いたのだと思います。

そこで今一度「品格」とは何かと考えると、この言葉は仏教から来ています。仏教では九品といひ、お浄土に往生する者を、まず大きく上品・中品・下品といふ三つに分けます。

そしてその三つの中をまた上・生・中・生・下生と三つに分け、左図のように九段階に分けるため、九品というわけです。



親無量寿經というお経の中にこの九品について、説明が為されていますので、大まかに内容を見てみますと、上品の人は心から極楽浄土に生まれたいと願ひ、そのための善行を行って、人生を生きる人のことでは、その修める行の程度によって、上生、中生、下生の別が生まれると書いてあります。そ

して中品も、極楽浄土へ生まれたいと望むのですが、もう一つ行き届かない善行を修めている人です。その善行にもやはり、上中下の生があります。そして、下品とは、極楽浄土へ生まれたいという願ひを持たず、悪業ばかりをおかして生きるもので

す。しかしその悪業を尽くす下品のものも、いよいよ死を目前にしたとき、善知識とあい、お念仏してぎりぎりのところで浄土に往生できるというのです。

この九品は、その品格と、生き方を問題にします。まず極楽浄土に生まれたいと言う目標をもち、それをどれほど願っているかということですが、それは願ひの強さによって、生き方が変わってくるものでありましよう。それが上中下の生に分けられていくわけです。上品の人は、強く極楽浄土に生まれたいと願ひ、仏の脱き示す道を忠実に生きていこうとします。また中品は上品ほどではないが、できれば極楽浄土に生まれたいという程の願ひなので、その心が生き方にも表れてきます。そして最後の下品のもの、極楽浄土に生まれたいという心を持っていないのですから、自らの生き方を顧みることはせず、自らの欲に忠実に、好き勝手に生きていきます。それが悪業となり地獄の因となります。

横網というも同じではないかと思えます。横網という名が表す世界を知らないものが横網という称号だけを持つているのですから、名は横網でも、中身は何の目標もモデルもなく、自らの生き方を問うものとはなりません。たくさんのお金も出る

ようですが、もし横網の称号が、お金と直結するものであるならば、道とは逆の欲の生き方の延長にある横網です。道がなくなるのは当然です。品格とは私たちが崇高な目標を持ち、そのモデルに近づきたいという思いをどれほど強くもって生きているか、又その生き方が身に付いたものに備わるものではないかと思えます。

華道・茶道・武道、あるいは「おびさび」といった日本の文化は私たちの欲するものとは違った世界を大切にすることを教えてきました。そして上品に生きる道を伝えたのです。

現代は日本人にさえその品格は見られなくなってきました。だからこそ品格本が大流行するのです。ましてや日本の文化をしなければならないものにそれを問うのはどうも無理な話とい

安楽寺法要案内		
四月	花まつり	日時 4月10日(土) 朝・昼 講師 池田 願雄 先生 テーマ いのちの花をさかそう
五月	降誕会	日時 5月16日(日) 朝・昼 講師 山下 義円 先生 テーマ 宗教はどうして信心信心と いうのでしょうか
六月	永代経	日時 ①6月18日(金) 朝・昼 ②6月19日(土) 朝・昼 講師 釋 徹宗 先生 テーマ ①帰るところのある人生を考える ②浄土真宗のかなめ



仏事の心のこころ

子どもが生まれたらお寺へ参拝しよう

赤ちゃんの誕生は、両親や家族にとって何ものにも代えがたい喜びの一つでしょう。人としてこの世に生を受けることは極めて得難いことであり、不思議としか言いようがありません。

このかけがえのない、「いのち」がすくすくと育ってくれるように、また人間に生まれた喜びをかみしめつつ人生を強く歩んでくれるようにと、親ならだれもが願うところです。そうした我が子の人生の出発に当たって、決して崩れることのない依り所となり、支えとなって下さる如く来さまに参拝する式を「初参式」と言います。

初参式は、子にとっての人生の始まりの仏縁ですが、同時に親にとっても、親として生きる出発点であり、子によって与えられた尊い仏縁です。世間では、子が生まれて一ヶ月ほどたつと、「お宮参り」といって、神社へお参りする人が多いようですが、

残念ながらお寺へお参りする人は限られてるのが現状です。日ごろ「私は門徒です」と言っている方も、なかなかお寺に参ってきません。これはどうしたことでしょうか。「死に関わる悲しみ事がお寺で、お祝い事はお宮さん」という意識が、人びとの心の奥深くまで浸透している現実を改めて驚かされます。結局、ご門徒一人ひとりが開法に励み、如来さまの深いお慈悲の心に触れることによって、自らの人生に目覚めていたたく以外にはないでしょう。

ともあれ、「死」が大きな仏縁になるのと同様に、「生」もまた尊い大きな仏縁となるのです。どうか初参式を人生にとっての大切な儀式だと心得て下さい。

